～輝きの子育て～

詩　「ひとつぶの水滴」

ひとつぶの水滴

雲の中で
ひとつぶの水滴が生まれた
地上めがけて
おちていった
無数の水滴はあつまって川となり
海へ流れていった
ぼくは何かの役に立ったのだろうか
ひとつぶの水滴は
そうおもった
ひとつぶの水滴がなければ
川もなく海もない
地球は完全に乾いてしまう

この詩は、現在最終週（９月２２日～９月２６日）を迎えたＮＨＫ連続テレビドラマ「あんぱん」の主人公のモデルとなった漫画家やなせたかし氏（１９１９年～２０１３年）のものです。自然の営みが書かれている何の変哲もない詩ですが何か心に響くものがあります。

雑誌「致知」２０２５年１０月号で、鈴木秀子氏（国際コミュニオン学会名誉会長）が、この詩をとりあげ、解説していますので、私の考えも入れて要約して紹介します。

静かに心の眼を凝らして、大自然に意識を向ければ川や海は一滴一滴の水から構成されています。一滴の水がなければ、この世界は存在することは出来ません。すべて無駄なく、この大自然が調和によって成り立っていることは、興味深いものがあります。

私たちは心の中で「自分はたいした存在じゃない」「本当に価値があるのだろうか」と時々弱い考えがよぎる時があります。

一粒の水滴が集まって川や海が出来るように一人の存在があってこそ、私たちの社会は成り立っています。そう考えると、一人一人の存在は小さいように思えても実は計り知れないほど大きなものがあります。

人の存在の尊さは、社会的地位や名声や財産などの基準で測れるものではありません。

「自分は何が出来るから偉い」「他人と比べて優れている」ということではありません。

例えば、年老いて体が不自由になり、思うように動けなくなったとしても、さりげない挨拶や笑顔で周囲の人たちを和ませることが出来ます。買い物をすることで、社会を潤すこともできます。そういう些細なことの積み重ねによって、この世界は動いています。

このことが「ぼくは、何かの役に立ったのだろうか」という一節が、その答えとなるでしょう。

大自然の持つ偉大な力に「ありがとう」と感謝する習慣はとても大切なことです。

因みに、この詩は１９７８年「誕生日の詩集」に入っているとのことで、ネットで捜しましたら、絶版、中古で一万円以上でしたので、購入をあきらめました。

片野　英司